

就学スタイルの変更とキャンパス再開発で、さらなる発展を

青山学院 理事長
半田 正夫



はんだ・まさお氏

1933年生まれ
1956年3月 北海道大学法学部卒業
1961年3月 北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
1971年4月 青山学院大学法学部助教授
1974年4月 青山学院大学法学部教授
1987年6月 青山学院大学法学部長
1999年12月 青山学院大学学長
2004年3月 青山学院大学退職(定年)
2004年4月 学校法人青山学院常務理事に就任
2010年10月 学校法人青山学院理事長に就任

現在、社団法人日本複写権センター理事長、日本テレビ放送網株式会社番組審議会委員長、財団法人放送番組センター副会長、財団法人放送倫理・番組向上機構(BPO)評議員会議長なども務める

青山学院は1874年にアメリカのメソジスト監督教会の宣教師たちによって創設され、一昨年に創立135周年を迎えました。キリスト教信仰に基づく教育を行う総合学園で、「地の塩、世の光」をスクール・モットーとしております。目立たなくとも、この世になくてはならぬ「塩」のような存在となり、世の隅々を明るく照らす「光」となれ。私はそう解釈し、学園運営の基本としております。

本学独自のカラーをつくる「青山スタンダード」

手前味噌とは承知しつつもあえて言わせていただくならば、私はかねてより、青山学院大学の学生は最高であると思っています。法律を教える者として、これまで都内の数多くの大学の教壇に立ちましたが、本学の学生ほど明るく、まじめで、人当たりの良い若者たちに出会ったことはありません。ひとことで言えば、ジェントルマンの気質が備わっているように感じます。最近はどこか大学生も似たり寄ったりという話を耳にしますが、私はそうは思いません。本学の学生からは他とはまるで違う印象を受けるのです。

その根底に「地の塩、世の光」というスクール・モットーがあることは間違いありません。加えて、幼稚園から大学院へと続く一貫教育の成果もあるでしょう。幼稚園は一学年40人程度でスタートし、初等部、中等部と上に行くにしたがって、学外からも数多くの方が入学してきます。ですから真に「生え抜き」といえる学生は多くないのですが、その学生たちが核となり、周囲を巻き込みつつ「青山カラー」とでもいふべき校風をつくりあげてきた。それは本学の誇るべき伝統であると思います。さらにまた、その伝統に厚みを増す取り組みも導入しています。それが「青山スタンダード」です。2003年、相模原キャンパスの開学と同時にスタートした全学共通の教養教育システムですが、当初より多くの大学から問い合わせをいただき、見学に來られました。大学教養教育のリニューアルというこ

とでは、私たちがその走りだったのかもしれませんが。

青山スタンダードとは、学部学科に関わらず、青山に入学した学生ならば必ず知っておきたい知識や教養についての教育を、少人数ゼミやレクチャーで展開する科目です。さまざまな特長がありますが、ひとつ挙げるなら、「コア科目」という科目群の中に教員がオムニバス形式で担当する授業があります。例えばあるテーマについて、教員が3人1組となって担当します。ひとつのテーマをいろいろな角度から見て考える習慣がつきますから、学生にとって大変意義深いものになっているはず。他に類を見ないこうした教育手法も、学生たちを青山特有のカラーに染める役割を果たしていると思いますね。

青山と相模原が独立し、各々の発展を目指す

募集環境の厳しいこのような時代に、私学は立ち止まるわけにはいきません。絶えず変化を求め、目に見える動きをしていく必要があると思っています。なかでも直近において最も大きな課題は、2つのキャンパスの再開発です。当初は、2012年4月からの就学キャンパス再配置を考えておりましたが、2013年4月を目標にこれを改め、2つのキャンパスを独立させる予定です。このたびの東日本大震災の影響で、資材の調達難や電力の制約などが予想されるほか、被災地の復興を最優先するという国を挙げての施策に積極的に協力していこうと考えているため、工事に遅れが出ることとなって参りました。したがって、学生の皆さんには大変ご迷惑をおかけして心苦しいのですが、就学環境にさらなる安全を期するために、1年間の繰り延べという苦渋の決断を致しました。これにより、2013年度以降、人文・社会科学系7学部の学生は青山キャンパスで4年間を過ごし、理工学部・社会情報学部は相模原キャンパスで4年間を過ごすことになるのです。

これにより相模原キャンパスには余裕が生まれま。そこに新学部を設置したいと考えています。理工系に親和性の高い学部や、留学生を多く受け入れられるような学部を候補として検討していくつもりです。

相模原市は昨年、政令指定都市となり、またリニア中央新幹線の間際駅ができる可能性が高いといわれています。米国から返還される広大な土地に関東でも指折りの工業団地を開発する計画もあるようです。このように大きな発展が見込まれる相模原市とともに本学も発展していけたら幸いであると思っています。

一方の青山キャンパスは、これまでの1.5倍の学生を収容していくこととなります。彼らが大学生活において支障なく、満足のいく毎日を過ごせるよう、親切で丁寧な事務体制や学生の居場所を整備することが喫緊の課題です。そのために校舎の新築や改修などを順次進めており、また図書館や博物館の新設を検討していますが、私が心がけているのは、変えるべきでないところは決して変えてはいけないということ。にぎやかな青山通りから本学に一步足を踏み入れると、そこには森閑とした空間が広がり、銀杏並木や間島記念館などの歴史的建造物がアカデミックなムードを醸し出しています。その一帯は、卒業生にとってのいわば「聖域」。いかに時代が変わり、人が変わろうとも、そこだけは変えてはいけない場所なのです。繁華街がありアクセスが至便なうえ、多彩な文化施設にも囲まれたここ青山は、大学の立地条件として最も恵まれた場所のひとつではないかと私は思っています。それを最大限に生かした戦略を立てていくことが、今まで以上に必要になるだろうと思っています。

さらに本学の課題を挙げるとするならば、こうした最高の立地条件やキリスト教に根ざした文化が幾多の紳士淑女を輩出したわけですが、その反面、本学特有の都会的な奥ゆかしさが、さらなる発展を妨げているといえないこともないでしょう。自己主張が強くないゆえ、実力に見合った評価を社会から受けていないという印象を学生のみならず教員からも受けることがあるのです。潜在能力が高く、まじめで、人柄の良い若者ばかりですので、そんな彼ら彼女らの能力を最大限に引き出すような教育を、これから全学を挙げて取り組まなければならないと自覚しております。 ■